

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 5 日現在

機関番号：13701

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23530996

研究課題名(和文)持続可能な市民社会を構築する環境教育思想に関する基礎研究

研究課題名(英文)Basic study of environmental education theory for sustainable civic society

研究代表者

今村 光章 (IMAMURA, Mituyuki)

岐阜大学・教育学部・教授

研究者番号：10300120

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：持続可能な社会を構築するための教育思想について、海外の研究者らの論考を手がかりにして、文献研究を行った。同時に、持続可能な社会のための教育活動の一環として、現在、注目を集めている森のようちえんの理論研究にも着手した。理論研究と具体的な自然学校の営みを検証し、両者を接合し、学校教育において、ESDのような取り組みとして、自然体験教育や環境的市民の育成を目指す教育が必要であると結論づけた。その際、市民の自主性と批判的思考力、加えて、自然に対する愛情が必要であることを確認した。

研究成果の概要(英文)：I researched the educational thought for building a sustainable society in the future, in the clue the discussion of researchers abroad. It was a kind of literature research. At the same time, as part of the educational activities for a sustainable society, now, it was also embarked on a theoretical study of the forest kindergarten of that has attracted attention. It is joined both, in school education, as efforts such as ESD(education for sustainable society), it was concluded that there is a need for education aimed at fostering nature experience education and environmental citizen.

研究分野：教育学

キーワード：教育学 環境思想 環境倫理 持続可能性 森のようちえん 批判理論 市民性

1. 研究開始当初の背景

地球環境問題を解決し、持続可能な社会を構築することは、現代社会の喫緊の課題であり、そのためには、環境教育 (Environmental Education) および「持続可能な開発のための教育 (Education for Sustainable Development: ESD)」を充実させることが急務である。

環境教育の必要性については、国内でも国外でも十分に認められている。たとえば、新教育基本法の第2条(教育の目標)においては、「4 生命を尊び、自然を大切に、環境の保全に寄与する態度を養うこと」が掲げられ、環境の保全は重要視されている。環境問題と教育の問題は切っても切り離せないほど密接にかかわっている。

国際的に見ても、テサロニキ会議(1997)やヨハネズブルク会議(2002)などで出された宣言等で確認されたように、地球環境を守ることを教育目的とする教育は、世界的な流れの中で大きな注目を浴びている。日本は、ESDにおいて主導的な役割を果たすことも求められている。

しかしながら、環境教育とESDが十分に発展しているとは言いがたく、しかも、環境問題の解決に十分な効果を挙げているとは言いがたい状況にある。

そこで、環境教育の理論面の検討をすすめるために、2005年に『持続可能性に向けての環境教育』(昭和堂:編著)を出版し、持続可能性を実現する教育について教育哲学的に考察してきた。また、実践面での検討をすすめるために、2007年には、『プラットフォーム 環境教育』(東信堂:共著)を刊行した。2009年には、『環境教育という<壁>

社会変革と再生産のダブルバインドを超えて』(昭和堂:単著)を刊行し、理論面と実践面の統合を目指した。

これら3冊の著作のなかで、従来の環境教育が、自然保護や公害教育、理科教育や科学教育という領域にとどまっていたのに対し、これからの「持続可能性を実現する教育」は、環境の持続可能性のみならず、人間個人として精神的に豊かに生きること、および、他者とつながって公正・公平な社会を民主主義的な方法で構築することを目的とする教育が必要であると結論づけた。環境教育は、環境の持続性のみを実現する教育ではなく、社会的な公正・公平や、自己自身のありかたや生きかたを考える教育・思想でもある。

端的に言えば、環境教育は、市民性を育成する新しい教育になってはじめて、環境問題の解決に対して実効性を挙げると考えられる。そのため、人格的にも知的にも成熟した市民を育成し、そのような市民が持続可能な社会を作り上げることに資する環境思想や教育思想についての教育哲学的な研究が必要である。同時にまた、日本の先進的な学校やNGOおよびNPOの事例や、海外の教

育活動について、「持続可能性のための環境教育 (Environmental Education for Sustainability)」の理論と実践の礎になるカリキュラムとコンテンツ開発が必須の状況にある。このような状況をうけて本研究に着手した。

2. 研究の目的

具体的な目的は、次の三点である。

(1) 環境思想の研究: 持続可能社会における自己のあり方について哲学的に考察したい。具体的に言えば、アルネ・ネスらの「ディープ・エコロジー」をはじめとする環境思想のなかで、「エコロジカルな自己 (ecological self)」の概念を研究し、持続可能社会における人間の自己の有り方(自己形成の方向性)を考察する。この点に関しては、アラン・ドレングソンらが、『ディープ・エコロジー』でも主張する「存在の豊かさ」という概念に加え、フィリップ・シャベコフの「環境主義」、ウルリッヒ・ベックのリスク社会論、ガタリの三つのエコロジーなどを検討し、持続可能社会における自己形成と社会のあり方について、社会哲学的な側面からも研究をおこなう。

同時に、現在もあらゆる分野で模索されている「持続可能性」について、科学教育の立場と教育哲学の立場から、その理念に関する理論的研究を行い、その内実を25年度までに具体化する。

(2) 環境教育思想の研究: ジルーやアップルなどの批判的教育学を手がかりに、現代社会の再生産に与していた学校教育の有り方を振り返り、新たな持続可能な社会を構築する教育の思想、および、環境教育思想史について研究し、あらたな教育目的概念を明らかにする。また、ルソー、ペスタロッチ、フレーベル、ヘルバルトなど、代表的な近代教育学思想のなかで環境とその改善がどのように結び付けられていたのかを考究する。また、オーストラリアの環境教育学者フィエンが『環境のための教育』で展開するような、批判理論に基づいた環境教育思想がどのような系譜と内実を持っているかについて、25年度まで検討する。

(3) 具体的な教育活動の研究

上記のような環境思想研究および環境教育思想研究を実際のものにするために具体的な教育活動について調査する。持続可能な社会を構築する次世代の教育システムについて、学校教育と社会教育、および、地域社会やNGO/NPOなどでも行われる環境教育を含め、現実的な教育実践に調査する。具体的には、自然学校、森のようちえん活動、幼児期の環境教育である。また、日本のNGO/NPOで行われる環境教育(環境学習活動)のプログラムを検討する。

3. 研究の方法

思想及び思想史研究として、先行研究の把

握を行いながら、アルネ・ネス、アラン・ドレングソンらの『ディープ・エコロジー』、あるいは、トランスパーソナル・エコロジーの文献や、フィリップ・シャベコフの『環境主義』、ガタリの『三つのエコロジー』、政治的エコロジー関係文献、ベックらのリスク社会論などを検討する。

次に、科学史的研究法に基づいて、持続可能性に関する研究がどのように発祥し、現在まで行われてきたのかについて研究する。その際、ジョン・マコーミックの環境問題史の手法を取り入れて、海外の文献を丁寧に収集して、生態学的な研究からいわゆる「環境容量 (carrying capacity)」の概念が出てきた経緯や、国際政治と経済学の理論から「持続可能な発展 (sustainable development)」の概念が世界的に脚光を浴びてきた背景、ならびに、各国の消費に関する NGO・NPO をはじめとする各種団体が、「持続可能な消費 (sustainable consumption)」の概念を提出した理由、さらには、「持続可能性 (sustainability)」そのものが登場し、どのようにして定義されているのかを明らかにする歴史的かつ理論的研究にも着手したい。こうした科学史や環境史が、環境思想と環境教育思想に与えた影響についても史的研究をおこなう。

さらに、環境教育思想に関しては、海外の文献、たとえば、教育哲学を背景にするイギリスのマイケル・ボネットの“Retrieving Nature”や、アメリカの批判的環境教育学研究者であるチェスター・パワーズの一連の著作、現実的な環境教育のプログラムを提唱するロルフ・ユッカーの“ Our Common Literacy ”や、環境リテラシーの研究で有名なデイビッド・オアー、批判的環境教育の大御所であるジョン・フィエン、持続可能性教育について総合的な研究グループを率いているハックルとステアリングらのプラグマティックな研究内容、および、教育思想の関連でエコ・ペダゴギークの提唱者でもあったドイツのデ・ハーンらをはじめとして、海外の環境思想・環境教育思想についてつぶさに検討する。

他方で、2002年から2009年にかけて、持続可能性を実現するための教育の論文や文献が、アメリカ、イギリス、ドイツをはじめ、世界各国で書物では200冊程度以上、論文としては1000を超えるものが出されていると予測できる。まずはこれらを収集し、テーマごとに整理し網羅して、鳥瞰的にどのような研究がなされているのかについて検討する。これらの研究の成果については、24年度を目処に、日本環境教育学会の学会誌に投稿する予定である。引き続き、イギリス：アンドリュース・ドブソンの環境的市民性 (Environmental Citizenship) の育成の教育のありかたを検討する。また、教育思想のなかで環境との関係を扱った論文と著作について検討する。さらに、市民性という概念

の系譜と市民性育成のための教育の思想の背景について研究するとともに、イギリスの市民性育成の教育について検討する。

さらに、教育実践の具体例として、自然学校や森のようちえんの活動を調査する。

4. 研究成果

思想研究をまとめるとともに、「エコロジカルな変革を担いうる『市民』とは」なにか、あるいは、「民主的であることの『正しさ』」すなわち、「環境問題への市民的対応における科学の役割」について総合的に研究することができた。

持続可能社会における自己のあり方について哲学的に考察した。アルネ・ネスのディープ・エコロジーをはじめとする環境思想のなかで、「エコロジカルな自己 (ecological self)」の概念がエーリッヒ・フロムの「」ある存在様式と通底していることを把握した。それは、日本語で「存在の豊かさ」という概念として示されるものと考えられる。

環境教育思想の研究では、批判的環境教育学を手がかりに、現代社会の再生産に与していた学校教育のあり方を根底から反省し、新たな持続可能な社会を構築する教育の思想が必要であることを把握した。

とりわけ、「持続可能な開発のための教育」と密接なかかわりを持つ森のようちえん活動について調査でき、市民活動の延長にある「森のようちえん」活動に焦点をあて、その思想的背景と実践についても調査できた。

詳細は、日本環境教育学会の学会誌に掲載した、「今村光章, 2014, 現代の学校教育の再考契機としての森のようちえんの意義 : 「自然学校としての森のようちえん」を手がかりに, 日本環境教育学会, 環境教育, 23(3), pp. 4 - 16. (査読有り)」の論文にゆだねるが、環境思想や環境倫理を具現化し、幼児や小学生に教える自然学校の在り方が、今後の持続可能な社会を構築するための教育のありかたの参考になることが明らかになった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

1. 今村光章, 2014, 現代の学校教育の再考契機としての森のようちえんの意義 : 「自然学校としての森のようちえん」を手がかりに, 日本環境教育学会, 環境教育, 23(3), pp. 4 - 16. (査読有り)

2. 水谷亜由美・今村光章, 2014, 記述的エピソード法を用いた行事型森のようちえんの実践報告, 岐阜大学教育学部研究報告 教育実践研究 16, pp.51-60.

3. 今村光章, 2013, 幼児は「森の絵本」で何に出会うか, 岐阜大学教育学部研究報告 人文科学 第61号 第2号, pp.141-152.

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 8 件)

1. 今村光章, 2014, 『アイスブレイク: 出会いの仕掛け人になる』, 晶文社.(単著:全166頁)
2. 井上有一・今村光章, 2012, 「環境教育の深みにあるもの」, 井上有一・今村光章編, 『環境教育学』, 法律文化社, pp.187 - 202.
3. 今村光章, 2012, 「詩的に大地に住まうこと: 環境教育の彼岸へ」, 井上有一・今村光章編, 『環境教育学』, 法律文化社, pp.99 - 120.
4. 今村光章・井上有一, 2012, 「環境教育から環境教育へ」, 井上有一・今村光章編, 『環境教育学』, 法律文化社, pp.1 - 8.
5. 今村光章, 2011, 「森のようちえんの意義を考える」, 今村光章編 『森のようちえん: 自然のなかで子育てを』, 解放出版社, pp.145 - 169.
6. 今村光章, 2011, 「森のようちえんの歴史と理念」, 今村光章編 『森のようちえん: 自然のなかで子育てを』, 解放出版社, pp.128 - 144.
7. 水谷亜由美・今村光章, 2011, 「ドイツの森のようちえんを訪れて」, 今村光章編 『森のようちえん: 自然のなかで子育てを』, 解放出版社, pp.72 - 88.
8. 今村光章, 2011, 「森のようちえん活動をはじめました」, 今村光章編 『森のようちえん: 自然のなかで子育てを』, 解放出版社. pp.10 - 27.

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

今村 光章 (IMAMURA Mitsuyuki)

岐阜大学・教育学部・教授

研究者番号: 10300120

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし